
浮氣

華泥棒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮氣

【著者名】

Z0459B

【作者名】

華泥棒

【あらすじ】

他の女とキスしちゃいけねえのか？お前以外の女に『好きだ』とも『愛してる』とも言つたことねえのに？つきあってるわけでもねぇのに？全部遊びなのに？それでもこれは浮氣なのか？

「亮のバカ！…もう知らない……！」

アイツのその言葉が頭の中でずっと ずっと 一日中こだましてた。

俺 坂下 亮は今日彼女とケンカした。

ケンカの理由は 俺の浮気。

浮気はこれまで何度もかしたことがあったが ああやつて怒鳴られたのも 頬をたたかれたのも初めてだった。

アイツはたいした力ないから たたかれてもそれほど痛くはなかつたけど・・・

静まり返った俺『達』の部屋

鳴らないインター ホンと携帯

人の気配のない空間

・・・気持ち悪い

吐き氣までしてきた。

「・・・ケホッ」

咳き込む。

ああ そういうれば俺が咳すれば それだけで風邪薬だとか買つきてたなアイツ・・・

心配性なんだよ。

浮氣だつて・・・心配しすぎだ。

遊びだよ あれぐらい。

ただ 酔った相手が『キスしてよ』とか言い出すからしただけで・・・

好きなのは 愛してるのは

お前だけだってわかんねえのか?

「・・・んなの 言わなくてもわかると思つたんだけどなあ・・・

」

言わなきゃわかんねえこともあるってことか。

キスは言われたらする。

罪悪感なんてなかつた。

だけど

アイツ以外の女にくつせー甘い台詞を書つたことはなかつた。

『好きだ』『愛して』

そんなの アイツ以外に言つたことはない。

キス以上のことだつて アイツにしかしたことねえぞ?

意思表示をしてはいるつもりだった。

「…………そついや アイツに俺から電話したことなかつたな」

いつも 電話はアイツから。

メールはたまに俺からするけど……

あ……だめだ んなの考えたら声聞きたくなつてきちゃつた……

目をつむつて椅子に座ると今朝のことを思い出す。

『……遅かったね 朝帰り?』

『あー……バイト先の女につかまつた。』

『……え?』

『バイトが終わって帰ろうとしたら密の女が飲みに誘ってきたんだよ』

『……何したの?』

『何つて?キスだけ』

『だけってなに……?』

『酔つたままおいで向こうのが誘つてきたからしだけだよ』

『……』

『何?』

『なんで私以外の人とキスするの?私のこと好きなんじゃないの?』

『好きだよ?お前のこと。愛してる 世界で一番愛してる』

『だったらなんで?なんで私以外の人と……』

『なんでお前以外としちゃいけねえの?』

『なんでつて……』

『たかがキスぐらいで怒んなよ お前にこくらでもしてやつてるだ
ろっ。』

『キス・・・ぐらい?』

『キスぐらい だろ別に。キスぐらい誰にでもできるぞ俺は。あ、
人間の女ならの話だけどな!アハハツ』

『亮のバカ!! 知らない!!!!』

バシンッ!!!!

長い長い巻き戻しと再生が終わる。

そういうえばアイツ 泣いてたつけ・・

そういうえばアイツ ビコ行つたんだ?

そういうえばアイツ 今風邪ひいてんだつけ?俺のがうつったつ
てたな・・

そういうえばアイツ 財布持つてねえな

そういうえばアイツ 携帯は持つてゐな

『やついいえばアイツ』が続く。

アイツの「」と以外考えられない

携帯が鳴る。

「・・・誰だ？」

ピッ

電話に出ると聞こ覚えのある女の声。

『もしもしし亮～？今ね～一人なの～家行つていー～？』

「別にいいけど～？」

『じゃあ今から行くねええ～～～』

ピーンボーン

ドアを開けると見覚えのある顔。

名前なんて覚えてねえ。

「『』めんね急にいへ会いたくなつちやつたの～」

「あつや」

部屋はやかましくなった

インター ホンと携帯は鳴った。

人の気配もある

なのに 吐き気がおさまらない

アイツじやなきやだめだ

「ねえ亮・・・キスしてえ？」

「・・・・・・・」

女の肩を握つて顔を近づける

・・・だめだ

気持ち悪い

「・・・・無理」

「ええ！？なんでええ！？」

「・・・・・気持ち悪い」

「はあ！？何それえ！最低！亮のバカア！……！」

『亮のバカ』

同じ言葉なのに 違う

女は泣きながら部屋を出て行つた。

アイツも泣いてた あの女も泣いてた

なのに 違う

全然違う

「……………梓」

1人の時 初めて名前をつぶやいてみた

声が聞きたい

顔が見たい

抱きしめたい

キスしたい

梓……

力チャ・・・

気づいたら携帯を握つてた。

プルルルル・・・プルルルル・・・

「・・・もしもし?」

「・・・・・・・梓?」

「亮・・・」

「・・・・梓 愛してる」

「え?亮?」

「梓 帰つてきてくんない?」

「やだよ・・・だつて亮 私以外でもいいんじょー!?」

「・・・無理 お前じゃないと・・・なんもできねえ

「・・・・・・」

「梓・・・会いたい」

それだけ言つと 意識が遠のいた。

「・・・う 亮・・・亮・・・」

「・・・・・ん」

目が覚めるとそこはベッドの上で 横を見ると心配そうな梓の顔があつた。

「・・・梓」

すぐに梓に抱きつく。

「だめ！寝てなきや！」

「・・・なんで」

「バカ・・・熱あがつて倒れたんだよ？もつ・・・」

ああ 吐き気はそのせいか？

・・・いや やつぱそれだけじゃないかも。

「・・・梓 愛してる」

「・・・バカ 病人が何言つてゐるのよ」

「・・・悪かつたよ もつしねえ。お前以外の女とキスしねえよ・・・

「・

「当たり前でしょー? 常識よー」

「・・・梓 こっち来いよ」

梓の腕をつかむと梓はため息をついた。

「・・・しょうがないなあもつ 私がいないとだめなんだね?」

「・・・ああ 僕はお前がいないと狂つちまつよ」

「バカ・・・んつ」

冷たい梓とキスをして あたたかい布団の中で 君と抱きしめあった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459b/>

浮気

2010年10月20日03時33分発行